教科教育専攻，社会科教育実践研究
担当教員：教育学研究科 教科教育専攻 社会科教育専修 担当全教員（１２名）

大学院生による研究授業の取り組み

社会科教育講座・川岡勉

対象となるのは大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修の大学院生であり，今年度の受講者は５名であった。

この授業は，高度な実践的能力を有する学校教育教員の養成という本研究科の目的に照らすと，社会科教育専修のコア科目と位置づけられるものである。授業のもち方については，これまで色々と試行錯誤を重ねてきたが，昨年度は大学院生による研究授業を附属中学校で行なう形をとり，一定の成果を収めた。これを踏まえて，今年度も附属中学校にお願いして大学院生の研究授業を実施することとした。

年度初め（４月）に担当教員全員と受講する院生が集まり，この授業の方向性・進め方について討議を行ない，教員側では川岡が中心となって歴史分野の教案づくりを進めていくことが確認された。中学校社会科の学習指導要領の確認，附属中学校で使用している教科書の分析と検討を行なった上で，院生各自の問題関心を出し合いながら，研究授業のテーマ・単元の選定を進めた。附属中学校の年間スケジュールを踏まえ，およそ江戸時代の伊予地域の歴史に照準を合わせることが合意され，内田九州男ほか著『愛媛県の歴史』（山川出版社，2003 年）の第五章「近世社会の成立と展開」，第六章「近世伊予の町と村」を学習した。７月には附属中学校の授業を見学して刺激をうける機会を設け，教育実践力とは何か，教育実践力向上のためにはどのような力を磨かなければならないかを討議した。

夏休み中に授業目標の明確化とテーマの具体化を求めておいた上で，後学期に入ってから「江戸時代の四国遍路」をテーマに３回の研究授業を実施するという方向性が決定した。以後，『四国遍路と世界の巡礼』などの文献を講読して教材研究を進め，授業の目標と３回の授業の構成プラン等について討議を重ねた。１２月に一応の指導案を作成し，１月に３回の模擬授業を行なって本番に備えた。

研究授業は附属中学校１Ａクラスにおいて２月９日・１０日・１６日の３回実施し，各回の研究授業の後に反省会をもった。見学した教員から率直な批判や感想が示されて，研究授業の成果や問題点が明らかになった。最後の授業においては，研究授業に取り組んだ経験を踏まえて総括的な議論を行ない，授業改善に向けたアンケートをとって終了した。

研究授業を通じて，獲得すべき目標の明確化，教材研究の重要性，授業構成と重点項目の整理，表現力の強化など，教育実践力にとって何が必要であるかを具体的な取り組みの中で考えることができたものと思われる。大学院生５名中，研究授業に取り組んだ３名にとっては，準備が大変で大きなプレッシャーがかかったようであるが，その分，非常に勉強になったと回答している。もちろん１回の研究授業で直ちに教育実践力が身につくというようなことはありえないが，貴重な体験となったことは事実であろう。

研究授業を担当しなかった院生については，教科書の分析や教材研究には関わったとはいえ，担当院生との間に経験の差が生じてしまうことになった。各院生の指向性の違いという問題があるものの，この点は検討課題である。

研究授業の準備作業が全体として遅れ気味で，あわただしく模擬授業，そして本番に臨まざるをえなくなってしまった点も反省材料である。テーマを早めにしぼりこむのはなかなか困難な部分もあるが，夏休み前にテーマが具体化できておれば，より完成度の高い研究授業になりえたのではないかと思われる。

調べてみて，これまで中学校社会科において四国遍路をテーマとした授業実践例がほとんど存在しないことが判明し，手探りで授業を作り上げていくしかなかった。四国遍路については最近様々な研究成果が発表されており，それを吸収しつつ，繁雑な内容に深入りすることなく，かつポイントを押さえながら授業を作り上げていくのは非常に難しいところであるが，四国遍路を題材とする一つの教育実践例を提示したという点で貴重な取り組みになったと考えられる。